星槎大学紀要（Seisa Univ. Res. Bul.）共生科学研究 No.17　75～83（2021）

研究ノート

インクルーシブ教育システムの実現に向けてすべきこと
――大学における特別支援教育の授業の取り組みから――

齋　藤　澄　子

SAITO, Sumiko

キーワード：特別支援教育、ICF、インクルーシブ教育

はじめに

今夏、新型コロナウイルスの感染拡大が心配される中で東京オリンピック・パラリンピックが開催され、人々の眼差しは選手たちの姿にくぎ付けになった。パラリンピックに対する広報活動も盛んに行われ、テレビでは「障害を越え競技に取り組む姿」が多く紹介された。

筆者は長期間にわたり学校現場で教員を務め、障害のある子どもたちへの指導・支援や障害児と健常児の交流活動に取り組んできた経験から、パラリンピックにはずっと以前から注目してきた。パラリンピックは、「障害」について知ったり考えたりするきっかけになると思ったからである。

障害児教育から特別支援教育へと移行し、14 年が経つ。特別支援教育は従来の「障害児教育」と現実的に、何がどう変わったのだろうか。平成 26 年に批准された「障害者の権利に関する条約」に基づき、平成 28 年 12 月の中教審答申ではインクルーシブ教育システムの理念の推進やインクルーシブ教育システムの実現に向け、学校教育の在り方や内容についても検討が加えられた。そこには、「生きる力」の育成に向けた教育課程の課題として、一人ひとりの子どもたちが障害の有無やその他の個々の違いを認め合いながら、共に学ぶことを追求する重要性が示され、その精神は平成 29 年 3 月告示の学習指導要領の基礎となった。学校現場は今、この学習指導要領を基にして教育活動を展開している。

平成 24 年に出された中教審答申「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」の概要によれば、インクルーシブ教育とは「人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであり…（後略）」（文部科学省 2012）とされているが、筆者は「この理念が実際には学校でどれくらい実現されているのか」という点に課題意識をもっている。

星槎大学共生科学部

その課題解決に向けたひとつの試みとして、大学の授業を通して学生たちの「障害者理解」を啓発することを試みた。本稿ではその実践を紹介し、インクルーシブ教育システムの実現に向けての提言とすることを目的としている。なお本稿で分析の対象としている授業実践は、齋藤（2021）で紹介したものと同一である。齋藤（2021）においては授業実践の概要を述べ、事例報告にとどまっていることに対し、本稿においてはインクルーシブ教育システムの実現に向けた提言のひとつの根拠として本授業実践を活用し、学生たちの反応を解説したりコメントの一部を紹介したりしながら、授業実践から得られた成果を用いてICF（国際生活機能分類）の考え方を学校現場に広めていく必要性を論じている。

１．大学における授業実践

ここで紹介する授業実践は、X大学X学科にて開講されている複数教員が担当するオムニバス形式の講義科目で、筆者が担当した1コマ（90分）を分析の対象とした。また筆者が担当した以下の授業実践を学外に発表することについて、実践した大学学科長の許可を得ている。

１）授業概要

① 授業実施年月：2019年7月
② 場所：X大学
③ 講義テーマ：「特別ではない特別支援教育　～共生社会の実現に向けて～」
④ 授業目的：特別支援教育開始後の学生の障害認知や特別支援教育に対する考えを共有し、授業を通してインクルーシブ教育の実現に向けた学生の意識改革をめざす。
⑤ 授業時間：90分
⑥ 参加学生：112名
⑦ 授業方法：課題に対する個人ワーク、グループワーク、全体共有を通して講義を行い、最後にフィードバックとして授業コメントを提出させる。
⑧ 授業内容：

導入　＊本日の講義のねらいと進め方について
　　＊「特別支援教育」という言葉の意味付け

展開　【ワーク1】・障害イメージマップの作成
　　⇒5分間の個人作業のあと、グループで意見交換する

【講義1】・ICIDH（国際障害分類）からICF（国際生活機能分類）へ
・障害者差別解消法について
・合理的配慮とは

【ワーク2】・自分の経験してきた「特別支援教育」について
　　⇒5分間の個人作業のあと、グループで情報交換する

【講義2】　・ビデオ視聴　NHK　ETV特集「いるんだよって伝えたい」
・講義　特殊教育から特別支援教育へ
～何がどう変わったのか～
・講義　インクルーシブ教育システムの構築に向けて
～障害のあるものとないものが共に学ぶために～
まとめ　＊東田直樹氏の著書『自閉症の僕が跳びはねる理由』（2016）の紹介
＊特別ではない「特別支援教育」をめざすために
授業後コメントシート　授業の振り返り・感想

2）授業の結果

（1）ワーク1　障害イメージマップの作成から

ワーク1では各自が「障害」という言葉からイメージすることをワークシートに記入して障害イメージマップを作成した後、グループで意見交換させた。112名の学生が作成した障害イメージマップを集計した結果、5分という限られた時間であったにもかわらず、平均回答数は9.8件で、11件以上回答した学生が全体の約4割いたことがわかった。この結果は筆者の予想を上回っており、学生により障害イメージのバラツキは見られたものの、どの学生も即答で様々な「障害イメージ」を回答したことが読み取れた。表1は、学生の回答を障害イメージの構成要素で筆者が分類したもので、カッコ内は学生の回答の一例である。表1のとおり、学生たちの「障害」という言葉に対するイメージ保持はかなり豊かであり、広範囲にわたることがわかった。

表1　「障害」という言葉に対するイメージ回答例

・目に見える障害と目に見えない障害の存在と対応の仕方の違い……（点字、白杖、車いす、スロープ、義足等）
・障害のある人に対する周囲の目の問題……（偏見、差別、いじめ等）
・障害特性……（こだわり、パニック、奇声、学習障害等）
・サポート（支援）の必要……（支援員、ボランティア、環境整備等）
・交流の意味と実際……（違いを感じる相手を理解する難しさ、コミュニケーション方法等）
・障害のある人の力……（集中力、天才、優しい、笑顔、豊かな感性、努力等）
・その他・……（自分自身や身内の障害に関わる体験談等）

次に、学生の回答を障害に対するプラスあるいはマイナスイメージという側面から、分類した結果を表2に示した。障害に対するイメージが好ましくないものを「マイナスイメージ」、障害からイメージすることが好ましい内容になっているものを「プラスイメージ」、事実の記載にとどまっているものは中立とした。表2のとおり、ワーク1では、中立的なイメージ保持が最も多く、マイナスイメージが、プラスイメージより10倍近く多く保持されていることがわかった。さらに、例えば身近に障害のある人がいる学生の回答はプラスイメージ多

く認められる傾向が見られた。このことから、個々の学生の置かれている状況によって、学生のもつ障害イメージの保持に個人差が大きいことが明らかになった。

表２　障害イメージの回答例のグループ化

カテゴリー	学生の回答例	平均回答数（件）
－〈マイナス〉イメージ	偏見、差別、いじめ、パニック、奇声、嫌悪感、かわいそう、困難、親が負担、冷たい視線	2.3
中立〈事実の記載〉	点字、白杖、車いす、スロープ、義足、学習障害、こだわり、後天性、支援員、ボランティア、環境整備、不自由、バリアフリー	7.3
＋〈プラス〉イメージ	集中力、天才、優しい、笑顔、豊かな感性、努力	0.2

（2）ワーク２　学生の経験を通した「特別支援教育」像

ワーク２では、学生自身のこれまでの学校生活を通して見聞きしてきた特別支援教育について知っていることや思っていることをワークシートに記入した後、グループで情報交換させた。112 名の学生の多岐にわたる回答の集計にあたり、文章表記が異なっているものの表現内容が同じであると判断できる回答は同一とみなし、8 つに分類した結果を表 3 に示した。ここから、多くの学生が「特別支援教育」を「特別支援学級での教育」と捉えていることが分かる。平成 19 年に「特別支援教育」が開始され、通常の学級にいる発達障害等の個別に配慮を必要とする児童への支援が強調されたにも関わらず、学生たちの意識は、「特別支援教育」＝「特別支援学級での教育」となっていたことは特筆すべきだろう。

表３　学生が捉えている「特別支援教育」像

	回　答	回答数（件）
1	一人ひとり（個性）に合わせた内容で学習している	18
2	教室が離れた（隔離された）場所にある	15
3	先生がたくさんついていた	13
4	学習は別だが、給食や朝の会は一緒にやっていた （交流の時に一緒に学習することもあった）	10
5	少人数のクラスだったが、全学年（1～6 年）が一緒にやっていた	8
6	遊びのような学習をしていた（プレイルームがあった）	7
7	かかわりがあまりなかったので、わからない	6
8	いろいろな子がいるので特別なプログラムでやっている。	6

※回答数が 6 人以上のものを掲載している。また白紙回答は 6 件あった。学生には複数回答を許可したので、複数回答が得られた場合は両方にカウントしている。
一方、ワーク 2 の学生の回答の中には、特別支援学級との交流を通して、課題意識を持っていると読み取れるものがあり、既にインクルーシブ教育システムの基礎作りが行われていた学校もあったと考察される。

（3）授業後のコメントシートから見る学生の意識変化

コメントシートはオムニバス形式の授業後に書いている授業の感想を書くためのもので、今回は筆者が担当した授業の112名のコメントシートを分析の対象とした。コメントシートに書かれた学生コメントの分析においては、他の教員の助言を受けたうえで、コメントシートを何度も読み、学生の言いたいこと（主題）を抽出し、分析した結果から、「意識変化」を基に6つのカテゴリーに分類した。その結果は表4に示す。なお表4に記載している学生コメントは、掲載許可を得た学生7名のコメント内容から各カテゴリーを代表する11件を抜粋したものである。表5は、各カテゴリー別の学生コメント数の、全体の回答数に対する割合を示したものである。

表5にあるとおり、筆者が担当した90分の授業において、32.7％の学生がこの授業を通して「障害イメージの変化」についてコメントしていることが読み取れる。さらに、その他の意識向上（「今までの自分への反省」「自分にできることの模索」「共生社会の実現に向けての意欲」等）を加えると、「変化が読み取れなかった」20.6％の学生コメントを除いた全体の約8割の学生に授業の前後で障害に対する意識変化が見られたと捉えることができる。

表4　授業後のコメントの分類

	カテゴリー	学生コメントの一例（一部抜粋，原文ママ）
1	**障害イメージの変化** 講義を受ける前の障害認知はマイナスイメージが先行していたが、講義後イメージが変化したとコメントされたものや講義を通して障害や特別支援教育に対する考えが深まったというコメント群	・障害という言葉をどう捉えるかによって意味が変わるということ身をもって理解した…このワークを通して、障害という言葉に対する考え方が変わった気がした。 ・障害児教育において1番大切と感じたことは、周りの環境。障害は、周りの環境によって人は大きく変わるとわかった。障害を直すのではなく、その障害と向き合って生活できる環境が必要だと感じた。
2	**今までの自分への反省** 幼・保、小中学校を通して会ってきた特別支援学級児童とのかかわりを振り返り「これでよかったか」「差別的な目で友達を見てきたのではないか」等の自己内省が書かれているコメント群	・改めて特別支援のことや障害についての授業を受けて、自分が小学中学校の時にクラスにいた特別支援の人を差別していたと思った。特に小学生の時は特別支援学級の子たちを差別していたなと思った。自分は普通で何も障害がなかったので、変わった人を見ると差別してしまっていたと、今思うととても情けなく恥ずかしい。 ・歩行が困難な仲間を「助けたい」「支えたい」と思って手助けしてきたが、その気遣いがかえってその友達を苦しめてしまったことがあった。…一人ひとりには一人ひとりに合った手助けがある。本人が障害を乗り越えようとすることを妨げてはいけないと感じた。

3	**今後の自分にできることの模索** 特別支援教育を障害のある人の問題として突き放すのではなく、自分に引き寄せて考えることができているコメント群	・今まで障害をもっている方に対して自分なりに配慮をしていたのだが、それは表面上だけの配慮であったということに気が付くことができた。なので今後は、そういう人々の気持ちになってみて自分に何ができるかを考えてから行動することが大切だと思ったので心がけてみようと感じた。 ・自分が教師になった時に、昔の自分と同じように特別支援学級の子を差別する子がいなくなるように、みんな特別で平等なのだと、もう一度自分に言いきかせて今後の生活にいかしていきたい。
4	**共生社会の実現に向けての意欲** これからの社会を担う一員としての責任を感じた意見や障害者差別解消法やインクルーシブ教育システムについての話、ICF の障害像の捉え方などを受け止め、これからの共生社会のあり方について課題意識を高めているコメント群	・特別支援の教室を出て、みんなの教室に行くことによって社会に出た時に対応できるようにすることはとても良い教育だと思いました。障害について改めて考えることができてとても勉強になった。 ・環境因子の話から、周囲の理解がより深まり、障害のある人の「できない」が少しでも減っていけば、それは障害ではなくなることもあり得る。確かに普通の人と比べたら不自由な面もあるとは思うけれど、障害をもつ人や私たちの考え方次第だということにとても共感できた。 ・特別支援学級が必要ないというわけではないが、普通の教室にいることでプラスになることは本当に多いと思う。その為には周囲の大人の協力が非常に重要であり、そういう時に協力できる人になりたい。
5	**その他** 自分、友だち、親せきなどの障害を見つめなおして書かれたコメントや今回の授業で使用した特別支援学級の児童に心を寄せる内容等が書かれているコメント群	・当事者本人が声を上げなければならないという言葉がとても胸に刺さった。他の人がどれだけ自分勝手なのか、いかに見て見ぬフリをしているのか…自分のように何も考えずに生きている社会でどんなことが起きているか、無知なことに腹がたった。 ・小学校の時、山に登る時、足が悪い障害の子がいて、荷物を持ってあげて山を登り切った時の表情は未だに忘れない。そんな人たちが少しでも多くいれば良いと思った。

表 5　学生コメントのカテゴリー別の意識変化（母数 112 名）

カテゴリー	コメントの割合（%）
1　障害イメージの変化	32.7
2　今までの自分への反省	15.9
3　今後の自分にできることの模索	26.2
4　共生社会の実現に向けての意欲	18.7
5　その他の変容	4.7
6　変化が読み取れなかった	20.6

注）コメントの内容が複数のカテゴリーに分類されるものがあったため、合計が 100% を超えたものとなっている。

（4）授業実践の考察と今後の課題

この授業実践を通して、筆者は「知らないことの罪」を痛感した。それは、多くの学生たちから「今まで自分では気が付かないうちに障害のある友達を差別してしまい、協力できなかったことを後悔している」という声が上がったことによる。この声こそが、特別支援教育元年に就学した多くの学生たちの本音だろう。

学生たちの心が最も動いたのは、ICF による障害像のとらえ方を講義した時だった。ICF による「環境因子」説は、これまで「障害者は自分とは関係ない」と思っていた学生たちの心に迫るものがあったと考えられる。個人因子に医療的な障害があったとしても、環境因子次第で不自由を感じないで生きることができるという ICF の考え方は、その環境になりうる周囲の人的環境の重要性を私たちに伝えた。学生たちが口々に「もっと早く知っていたら、もっとできることがあったと思う」と言った時に、当時学校現場にいた筆者としては、少なからず苦い思いであった。

学生たちに限らず人間は「知らない」ことに対する不安や緊張から、自然な対応や交流ができないことは誰でも経験している。2016 年に起きた相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」の事件は記憶に新しい。小さい頃から、障害をもっている人に対する理解や接し方についての具体的な学びが必要だったことを印象付ける事件だったと思う。この授業は筆者にとって、共生社会の実現に向けて大切なことは、まず「知る」ことではないかと改めて考える契機となった。インクルーシブ教育システムの構築は、そのための一歩であると考えることができる。人間は障害のあるなしにかかわらず、誰しもが「特別な存在」であり、尊重されなければならない。今回の講義「特別ではない特別支援教育」は、最低限学生にそのことに気付いてほしいというねらいを含んだ授業実践だったと言える。

障害とはどのような状態を指すのか。この問いの答えは、時代と共に変化してきている。パラリンピックの選手を見て「障害者は自己実現が難しい人」と思った人は誰もいないだろう。障害があってもスポーツを楽しんだり記録を更新したり争ったりできるということを目の当たりにして、障害者と健常者の線引きは本当に必要なのか？という考え方も耳にした。身体機能的な違いはあるにしても、必要な支援があれば健常者と同じように、あるいはそれ以上の練習成果を出すことだってできることを多くの人が実感できたはずだ。障害者であってもなくても、不自由さや課題は誰にでもある。誰しもがそういう課題を抱えて生きている。パラリンピックをひとつの契機として、今、これまでの「障害者へのまなざし」を根本から考え直す時が来ているのではないだろうか。

パラリンピックが終了し 10 日ほど経った日の新聞で、朝日新聞科学医療部次長である岡崎明子氏の「健常者という『枠』　記事に出る『やのに感』の怖さ」という寄稿を読んだ。その中で、岡崎氏は「障害者やのにがんばっている」という「やのに感」の怖さに気付くことが大切だと説いていた。この「やのに感」こそ、目に見えない心のバリアであり、課題となるものなのだ。このバリアを乗り越えるための取り組みについて次に考えていきたい。

２．ICF を活用した共生社会の実現への取り組み

徳永（2013）によれば、ICF は「障害のある人だけでなく、すべての人を対象にしたものである」。学校現場には障害のない児童生徒も様々なニーズをかかえている。社会全体が、障害のあるなしで人を見たり、分けたりするという考え方を乗り越えることが必要なのだ。文部科学省は、平成 21 年の「特別支援学校学習指導要領解説　自立活動編」において、障害の捉え方の変化として ICF の概念的な枠組について紹介している。

本報告の授業実践から「障害」という言葉のイメージにマイナス面が先行している学生たちの傾向が認められたが、ICF は「障害のマイナス面だけでなく、プラスの面にも着目する」という考え方に立った画期的なものであった。医学と社会の統合モデルとしての ICF は、障害が周囲の環境によって作り上げられているという側面に着目し、社会の環境を変えることで障害をなくすことに繋がるという考え方が示されている。2016 年に施行されたいわゆる障害者差別解消法はこの ICF の社会モデルの考え方に基づいている。しかし、社会全体において ICF に対する認知度は低い。多くの人にあまり知られていないのである。

ICF は生活機能が何らかの理由で制限されている状況を「障害」と呼び、その状況に影響を与える要素として「環境因子」と「個人因子」をあげている。この環境因子には、家族や友達、社会の人々の眼差し等の人的な環境が含まれている。このことをもっと多くの人々が理解し、実践できれば共生社会の実現は今よりもっと前進できるのではないだろうか。

「共生社会」とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が積極的に参加・貢献していくことができる社会であり、それは誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様なあり方を相互に認め合える全員参加型の社会をさす。この共生社会が実現し推進されていくためには、ICF の考え方をもっと多くの人々が知り、受けとめる必要があると考える。

３．学校現場のインクルーシブ教育実現のために

冒頭で引用した平成 24 年の中教審答申「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」には、「5. 特別支援教育を充実させるための教職員の専門性向上等」の中で「インクルーシブ教育システム構築のため、すべての教員は、特別支援教育に関する一定の知識・技能を有していることが求められる」と書かれている。この答申を受け学校現場では、インクルーシブ教育システム構築に向け学校に義務付けられた「合理的配慮」と「基礎的環境整備」が、具体的にどう実践されているのかを追求していく必要があるだろう。筆者は、ICF の考え方に基づく発達障害のある児童の学級の周りの子どもたちへの理解・啓発は、発達障害に関する教師の専門性の一端であり、学級という人的な環境は基礎的環境整備の一部であると捉えている。すべての教員にそのような研修が用意されると同時に、学校現場では各教員が研修を受けるゆとりが見いだせるような仕事のマネジメントに取り組むことが急務である。

インクルーシブ教育システムの構築のためには、まず教室にいる子どもたちが、相互に存在を認め合うことから始めなければならない。「認め合う」前提としては、まず「知る」ことが大切になるだろう。その際に、「障害とは」とか「特別支援教育とは」という内容も避けて通ることがないようにしたい。「差別はいけない」と言葉で教えるのではなく、「障害を生んでいる環境の一部に自分たちがいる」という気づきを促すために、このような内容を学習の要素として取り入れる必要があることを、筆者はこの授業実践から確信した。学校現場は、柔軟な思考が可能な子どもたちに早い時期からこうした障害者理解に関する情報を伝え、インクルーシブ教育システムの目標の実現に向けて、障害のある子もない子も同じように生きる力の糧になるような教育活動を推進してことが重要である。

河村茂雄（2007）は、特殊教育から特別支援教育への転換期にあたり、「特別支援教育を『特殊なこと』としてではなく、「通常の教育活動」にしっかり位置づけて、一部の子どもたちだけでなく、すべての子どもたちの学校生活の満足感を高めるような効果につなげる」必要性を説いている。そして、特別支援が必要な子どもも含めたすべての子どもたちの学級生活の満足感を高めるような学級経営の進め方やそれを支える校内組織体制・システムの構築について提唱している。筆者はこのような考え方を基本として、学校が「特別支援教育」を単独にとらえるのではなく、すべての教育活動において個々の子どもたちの違いに応じた適切な指導や支援を実現させていく延長上に特別支援教育の前進があると捉えている。そしてその実現のために、インクルーシブ教育システムの構築を位置づける必要があると考える。

新型コロナウイルス感染防止等の課題も押し寄せ、学校現場は多くの課題を抱えているが、一人ひとりの子どものニーズを受け止め、持てる力を高めていけるような教育をめざして歩み続けていくことが必要だ。筆者自身もその目標に向かい、今後も学校現場の教師たちと協働し、インクルーシブ教育の推進に向かって歩み続けたい。

引用文献

河村茂雄（2007）. 特別支援教育を進める学校システム. 図書文化社，8.

文部科学省（2012）. 中央教育審議会答申. 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321668.htm（2021 年 11 月 28 日閲覧）.

東田直樹（2016）. 自閉症の僕が跳びはねる理由. 角川書店.

NHK（2017）. ETV 特集　いるんだよって伝えたい，2017 年 5 月 27 日放送.

岡崎明子（2021）. 多事奏論 . 健常者という「枠」 記事に出る「やのに感」の怖さ. 朝日新聞 2021 年 9 月 15 日付朝刊.

齋藤澄子（2021）. 周りが変われば、子どもは変わる！. 翔雲社，195-201.

徳永亜希雄（2013）. 第 1 章 1 節　特別支援教育における ICF/ICF-CY 活用について考える. 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（編著）. 特別支援教育における ICF の活用 Part3 学びのニーズに応える確かな実践のために. ジアース教育新社，4.